

望岳山荘にて

今年も大学入試のシーズンがやってきた。長野県下では、このところ大学合格率が低下し、教育界としての伝統に翳りが見えるこのことで、様々な論議や対策が講じられつつあるようだが、いわゆる偏差値ランキングや国立大学への現役合格者数だけを物差しにして問題を論ずることは、あまりにも時代錯誤であり、決して生産的ではないように思う。

なぜなら、大学そのものの評価が、最近では急速に変わりつつあるし、徐々にはあるが、国立大学も多面的な時代に対応して脱皮しつつあり、国公私立を問わず、それぞれの大学がかなりの個性化しつつあるからである。それよりも、二十一世紀の国際化時代を担う受験生諸君は、もっと主体的に大学を選ぶという努力をしてほしいと思う。私自身、多年、大学入試や入試改善に携わってきた経験からしても、入試のあり方だけで問題が解決するとは思っていないし、大学自身、制度的にも組織的にも、またカリキュラム上も、もっと抜本的な改革をすべきだと考えている者の一人ではあるが、ここには、これらの問題に立ち入る紙数はないので、受験生諸君へのガイダンスの意味で、私の専門領域、つまり国際関係論や地域研究(外国研究)などの人文・社会科学分野に限って、いくつかの最新情報を提供させていただくにとどめたい。

大学入試と大学選択

相対的には、国立大学の地盤低下に比して、このところ、新しい時代に対応すべく努力を重ねてきた私学の充実と向上は著しいものがある。国際基督教大学(ICU)は、そのような成果がいまや国際社会でも広く認められている戦後派私学であるが上智大学も、

このユニークな個性で大学改革に成功して注目されており、大東文化大学も外国語学部の水準が大いに高まり、また国際関係学部が教授陣に人材を集めている。

このような私学の躍進に比して、国立大学の脱皮は遅々としているが、たとえば経済学部では大阪大学が東大や京大よりも、はるかに水準の高いスタツフを擁し、国際的評価も高まってきている。今年、明治以来、高級官僚やすぐれた学者を輩出してきた東大法政政治学系には、ついに駒場の教養学部からの進学者が定員に満たないという地盤低下をきたし、東大法学部

多くの人材を輩出してきている。私のゼミナールには、私が清水中学校や深志高校でおこなった記念講演を聴いて入学したという学生が何人も入ってきてくれているが、そのような選択は、やはり嬉しいことである。入試センターテストの点数についても、傾斜配点を多くの大学は導入しており、数学は苦手でも英語や社会科が得意だという受験生にはきわめて有利な二次試験も各大学で試みられているのだから、受験生諸君は、各自の個性と時代の変化を先取りして自ら主体的に大学を選んでほしい。松本地方の受験生諸君の健闘を切に祈っている。

(中嶋 嶺雄・東京外語大教授)